

2020事業の本格展開に向けて

「会員サービス、大学支援の進化」

明専会会長 高原 正雄（機43）



新しい年を迎えるあたり、心よりお慶びを申し上げます。

一昨年（2018年）の11月に、中国武漢で発生した新型コロナウイルス（COVID-19）は、WHOの最初の予測をはるかに上回る勢いで世界中に拡散しました。春頃からは、世界中がまるで「全体止まれ！」の号令で、前につんのめった状態になり、あらゆることが機能不全に陥ってしまいました。幸いにして、日本は、近隣諸国や欧州のような厳しい規制の対策を実施しなかったにもかかわらず、感染者や重篤者、死者は少なく推移しております。その理由は何なのか？ まさか、麻生副総理の「国民の民度のレベル

が違う」発言に賛同するわけではありませんが、日本人の公衆衛生意識の高さに起因していることは間違いないと思われまます。いずれにしても、昨年は、このコロナのせいであらゆるイベントや大切なセレモニーなどが止まった時間の遙かあなたに置き去りにしたままになってしまいました。

一方、昨年も九州は豪雨で大災害となりました。7月7日には珠珠川の氾濫から始まり、下流の筑後川も至る所で氾濫しました。私は、9月に阿蘇山を源流とした筑後川沿いを訪ねて見ましたが、その被害の大きさは筆舌に尽くせないものがありました。毎年、そして、年々酷くなっている豪雨は、故郷九州を容赦なく襲い、山も、川も、そして、人造物をも壊し続けていることに、憤りに似た悔しさを感じております。幸いにして、明専会会員に被害がなかったことに、まずは安堵しております。そういった中、明専会の大きな変

化は、北九州の5支部が統合し、念願の北九州支部が誕生したことでありまます。これで、本部地区における明専会機能が強化され、より建設的な大学支援が可能になると期待されます。また、宮若支部の誕生は、近年久しくなかった新支部の誕生となりました。さらに、海外ではベトナム明専学友会の誕生がありました。このように、国内外での明専の絆が拡大されてきております。加えて、学生、若手、女性会員の絆の拡大も成果が形として表れております。これらの絆の拡大のためにも、財政基盤の強化が不可欠であります。一昨年（2019年）からスタートした終身会員制度に対し、多くの会員からの賛同が得られ、既に1650名を超える会員が終身会員になられております。

さて、母校創立100周年および明専会設立100周年を記念とした10年間の事業期間とした大学・学生支援は、いずれも大きな成果をあげて推進してきております。記念事業としてスタートしたそれらの各種支援事業は、すでに軌道に乗って自立できるレベルに到達してきております。そこで、創立100周年事業に代る次なる10年の

新しい明専会事業を創出するため、「2020事業検討委員会」で協議を行ってきた結果、次の4つの事業に特化する方針を固め、すでに具体的な実行計画の作成に取りかかっております。

- ① 大学の研究支援事業
- ② 学生支援事業
- ③ 国際ネットワーク構築事業
- ④ 同窓の絆強化事業

これらの事業は、明専会が主体的に行うことに力点を置く企画となっております。その結果、「会員サービスの進化」、「大学・学生支援の進化」につなげていくものと確信しております。

さて、今年第一の願いは、コロナが収まること、少なくともコロナと上手に付き合っていく生活様式が確立され、東京オリンピックの開催をはじめ、多くの文化的、芸術的、学問的活動などが安全に行われることとあります。共に願いましょう！末筆になりますが、皆様のご多幸の年になりますようお祈りして、年頭のご挨拶といたします。

（いすゞ自動車・理事）